

令和5年度
薬剤耐性（AMR）に関する
認知度調査

調査結果報告書

2024年9月

農林水産省消費・安全局
畜水産安全管理課

はじめに

細菌による感染症を治療するため、抗菌薬が広く利用されていますが、その不適切な使用により抗菌薬の効かない薬剤耐性菌が増えると、動物の疾病が治療できないだけでなく、直接または間接的に人の健康へ影響を及ぼす可能性があります。

このため、世界保健機関（WHO）は、2015年に国際的な薬剤耐性対策の行動計画を策定し、加盟国でも国家行動計画を策定するよう要請しました。

我が国では、2016年に薬剤耐性（AMR）対策アクションプラン（2016-2020）が関係閣僚会議により決定され、その後2023年に決定された第2期薬剤耐性（AMR）対策アクションプラン（2023-2027）に基づき、人医療、動物、農業、環境等での薬剤耐性対策の取組が進められています。

今般、これまでの薬剤耐性対策の取組の効果を測り、更なる改善を行うべく、動物分野の関係者の皆様方における薬剤耐性に係る認知度調査を実施しました。

関係者のご協力への感謝を申し上げるとともに、本認知度調査の結果が皆様方の薬剤耐性対策の活動にお役立ていただきますと幸いです。

今後とも動物分野への薬剤耐性対策の推進に御協力をお願いいたします。

目次

1. 認知度調査結果の要約

2. 回答者プロフィール

3-1. 生産者への認知度調査結果

3-2. 臨床獣医師（産業動物、小動物）への認知度調査結果

3-3. ペットオーナーへの認知度調査結果

参考1. 生産者への認知度調査結果一覧

参考2. 産業動物臨床獣医師への認知度調査結果一覧

参考3. 小動物臨床獣医師への認知度調査結果一覧

参考4. ペットオーナーへの認知度調査結果一覧

1. 調査結果の要約

• 全体

生産者、産業動物臨床獣医師、小動物臨床獣医師、ペットオーナー、の4つのクラスターを対象として薬剤耐性に関する認知度調査を実施し、合計で1944の回答がありました。全てのクラスターで「薬剤耐性（AMR）対策アクションプラン」の認知度が低い結果でした。また、臨床獣医師においては診療対象の分野を問わず認知度の低い回答がみられたほか、抗菌剤の慎重使用に関する知識はあっても日々の診療で実践されている割合が低いことがわかりました。生産者やペットオーナーでは、質問内容によって認知度にばらつきがみられ、普及啓発にあたって注力すべき内容が明らかとなりました。

• 生産者

薬剤耐性菌を増加させる原因、薬剤耐性菌による悪影響、抗菌薬の使用を減らす手段（飼育環境の改善、ワクチン使用による疾病の発生予防）に関する認知度が高い結果でした。一方で、抗菌薬がウイルス感染症に効果がないことや飼料中に抗菌性飼料添加物が添加されていることの認知度が低い結果でした。飼養畜種による認知度に顕著な差はみられませんでした。

• 産業動物臨床獣医師

薬剤感受性試験の実施や抗菌剤の適正な選択の必要性に関する認知度は高い結果となりましたが、実際の診療における薬剤感受性試験の実施率が20%以下との回答半数を占める結果となりました。また、抗菌薬の抗菌スペクトルの広狭の認知度が低い結果となったことから、スペクトルが広い抗菌薬の使用による薬剤耐性菌の影響が懸念されます。

- 小動物臨床獣医師

産業動物臨床獣医師と同様の傾向がみられ、診療動物種によって認知度に大きな違いは見られませんでした。

- ペットオーナー

生産者に比べて、薬剤耐性対策に関する認知度が低い傾向がみられました。これは、生産者が獣医師や医薬品等の販売店と日頃から接していること、抗菌薬や抗菌性飼料添加物を含む飼料を自ら投与する機会があることも影響していると考えられました。一方で、ペットがウイルス感染症と診断された際に抗菌薬の処方を希望しない傾向が確認されました。

2. 認知度調査の概要

- ・調査期間：令和6年2月5日（月）～3月15日（金）
- ・調査方法：WEBアンケートフォーム
- ・回答数と回答者のプロフィール

a. 生産者（回答数：238）

最も多く飼養している畜種	乳牛	肉牛	豚	肉用鶏	卵用鶏
回答数	107	34	55	16	17

最も多く飼養している畜種	種鶏	その他*
回答数	8	1

* 肉用鶏・卵用鶏

b. 産業動物臨床獣医師（回答数：315）

診療動物種	乳牛	肉牛	豚	肉用鶏	卵用鶏	その他*
回答数	251	274	51	13	15	46

* 馬（軽種馬、重種馬）、ヤギ、綿羊、アルパカ、ミツバチ、犬、猫、うさぎ、コンサルティング

c. 小動物臨床獣医師（回答数：279）

診療動物種	犬	猫	その他*
回答数	268	268	118

* うさぎ、小鳥、鴨、亀、ヘビ、トカゲ、フェレット、ハリネズミ、デグー、フクロモモンガ、ハムスター、モルモット、トカゲ類、金魚、錦鯉、野生動物など

d. ペットオーナー（回答数：1,112）

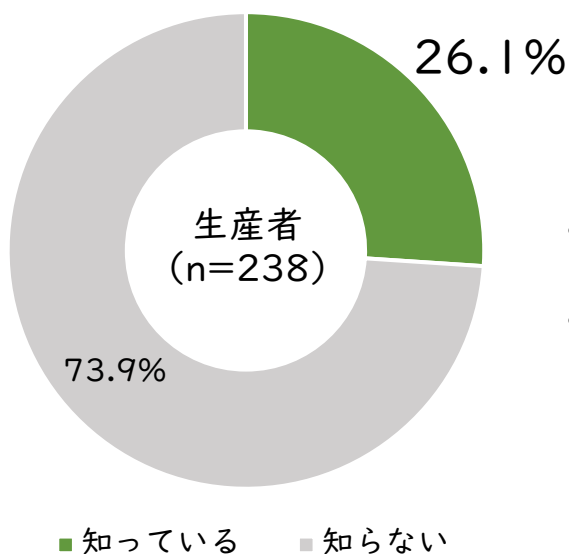
飼育動物種	犬	猫	その他*
回答数	402	748	104

* うさぎ、リス、ハムスター、ハリネズミ、デグー、インコ、あひる、文鳥、鳩、ヤモリ、イモリ、トカゲ、ヘビ、ウーパールーパー、フクロモモンガ、チンチラなど

3-1. 生産者への認知度調査結果

【設問1】

我が国の薬剤耐性対策をまとめた薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか。

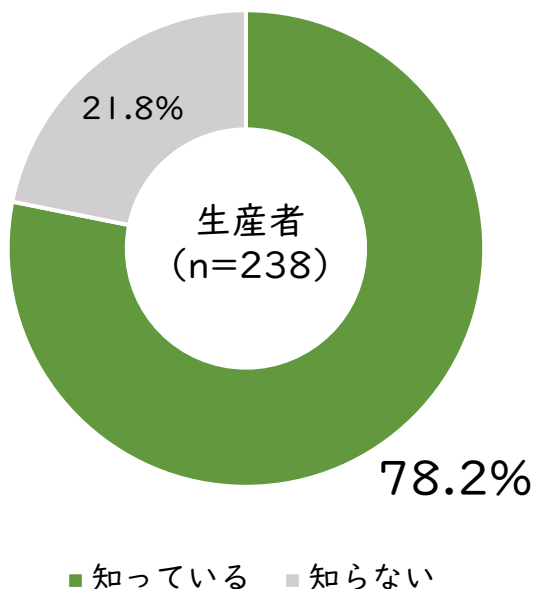


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約26%だった。
- アクションプランの存在、内容の周知が課題である。

【設問2】

薬剤耐性菌が人と家畜の細菌感染症治療を難しくすることをご存知ですか。

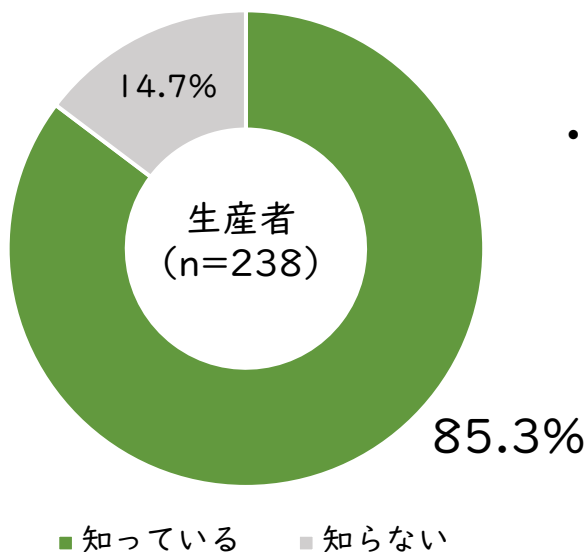


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約78%だった。

【設問 3】

抗菌薬の不適切な使用は、薬剤耐性菌の増加につながることをご存知ですか。

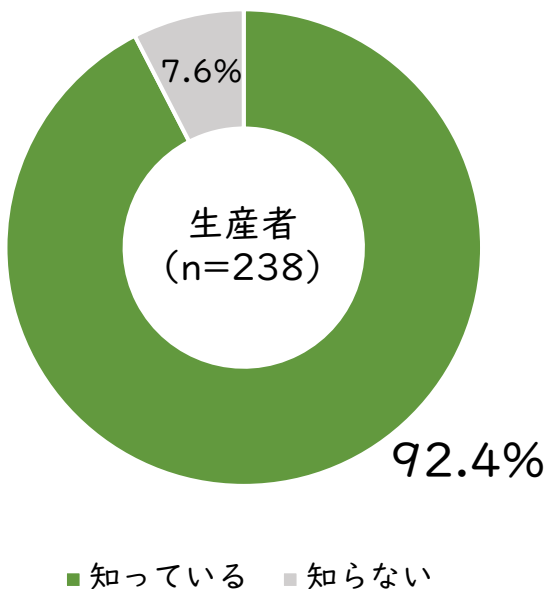


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約85%だった。

【設問 4】

飼養環境の改善やワクチンの使用により、病気の発生を予防することが、抗菌薬の使用を減らすことをご存知ですか。

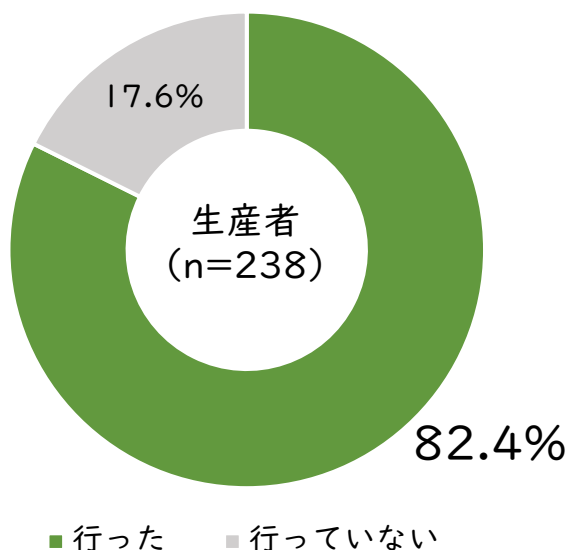


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約92%だった。

【設問 5】

過去1年間で、疾病の発生を減らすために飼養環境の改善や飼育動物へのワクチン接種を行ったことがありましたか。

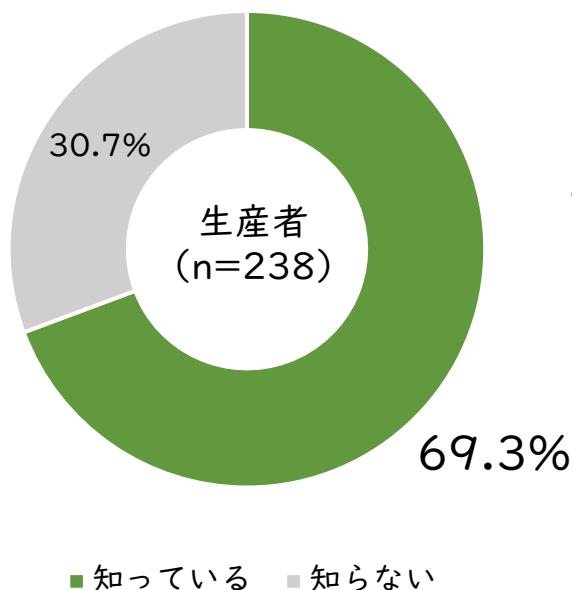


【コメント】

- 行ったと回答した割合は約82%だった。

【設問 6】

抗菌薬は、ウイルス感染症に効果がないことをご存知ですか。

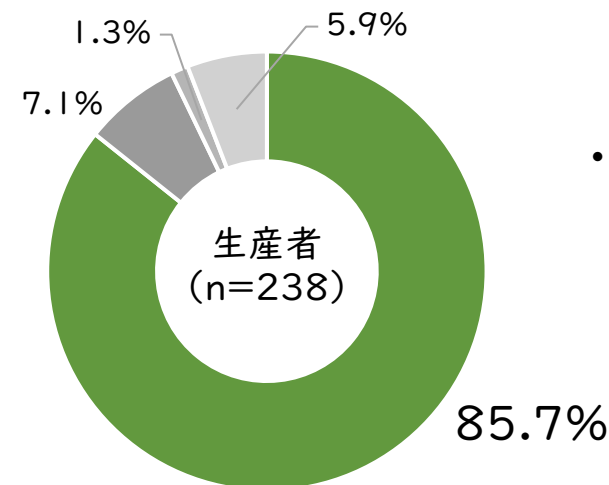


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約69%だった。

【設問7】

過去1年間で、ウイルス感染症と診断されたが、獣医師に抗菌薬の処方を希望したことがありますか。



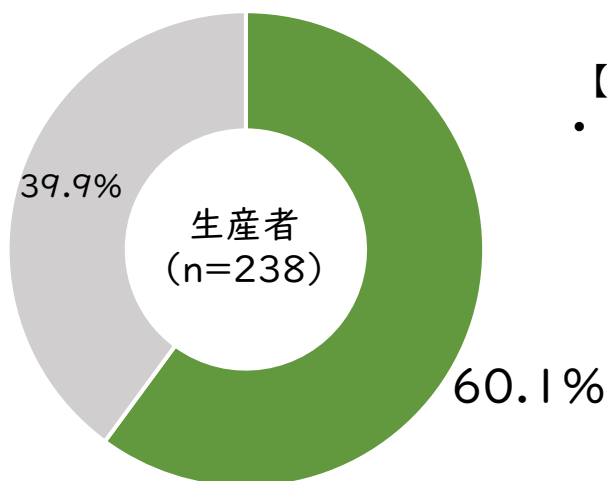
【コメント】

- 希望したことがないと回答した割合は約86%だった。

- 希望したことがない ■ 概ね3回に1回程度
- 概ね3回に2回程度 ■ 毎回希望している

【設問8】

飼料工場から購入された飼料にどのような抗菌性の飼料添加物が混ぜられているかご存知ですか。



【コメント】

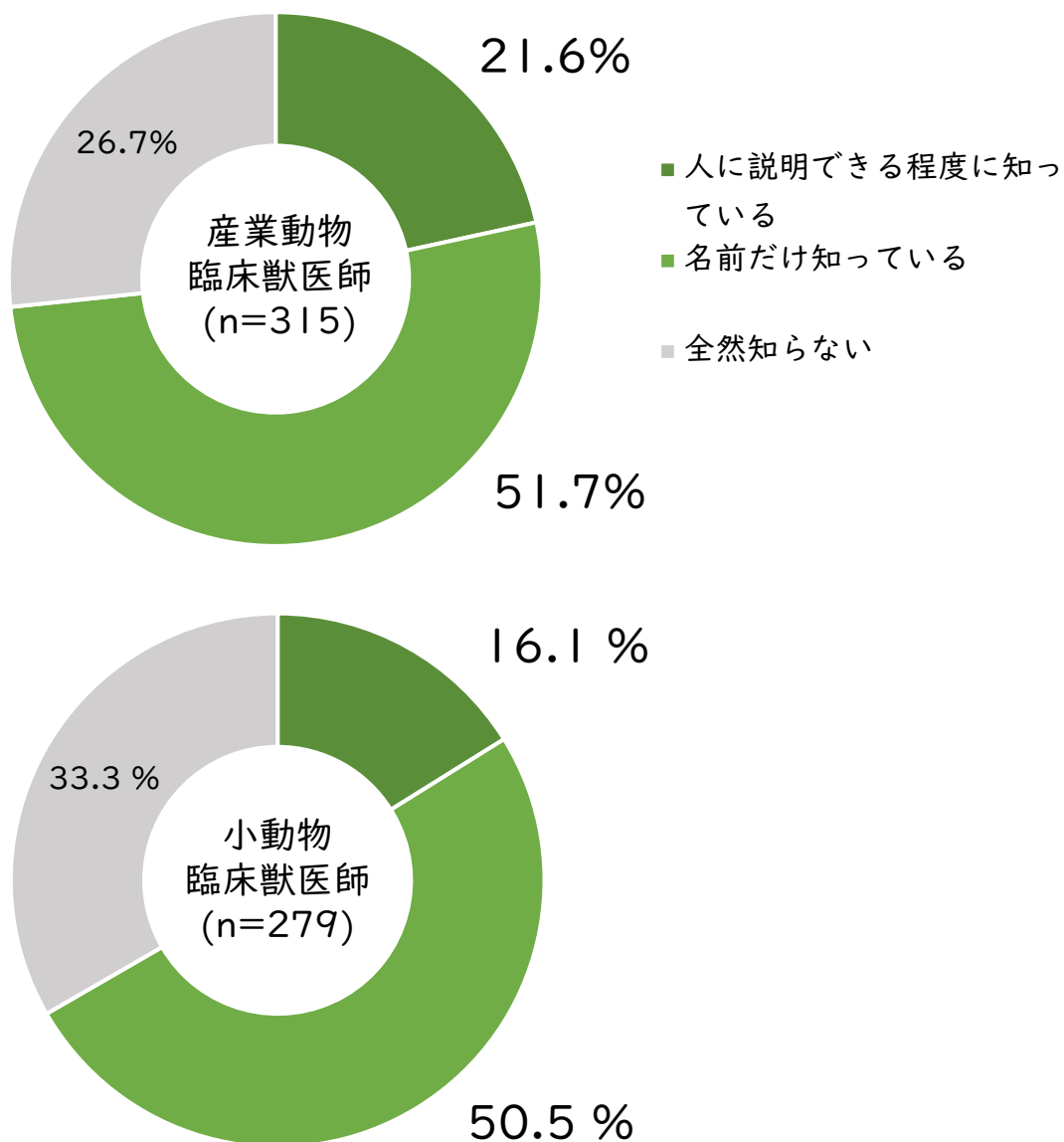
- 知っていると回答した割合は約60%だった。

- 知っている ■ 知らない

3-2. 臨床獣医師（産業動物、小動物）への認知度調査結果

【設問1】

我が国の薬剤耐性対策をまとめた薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか。

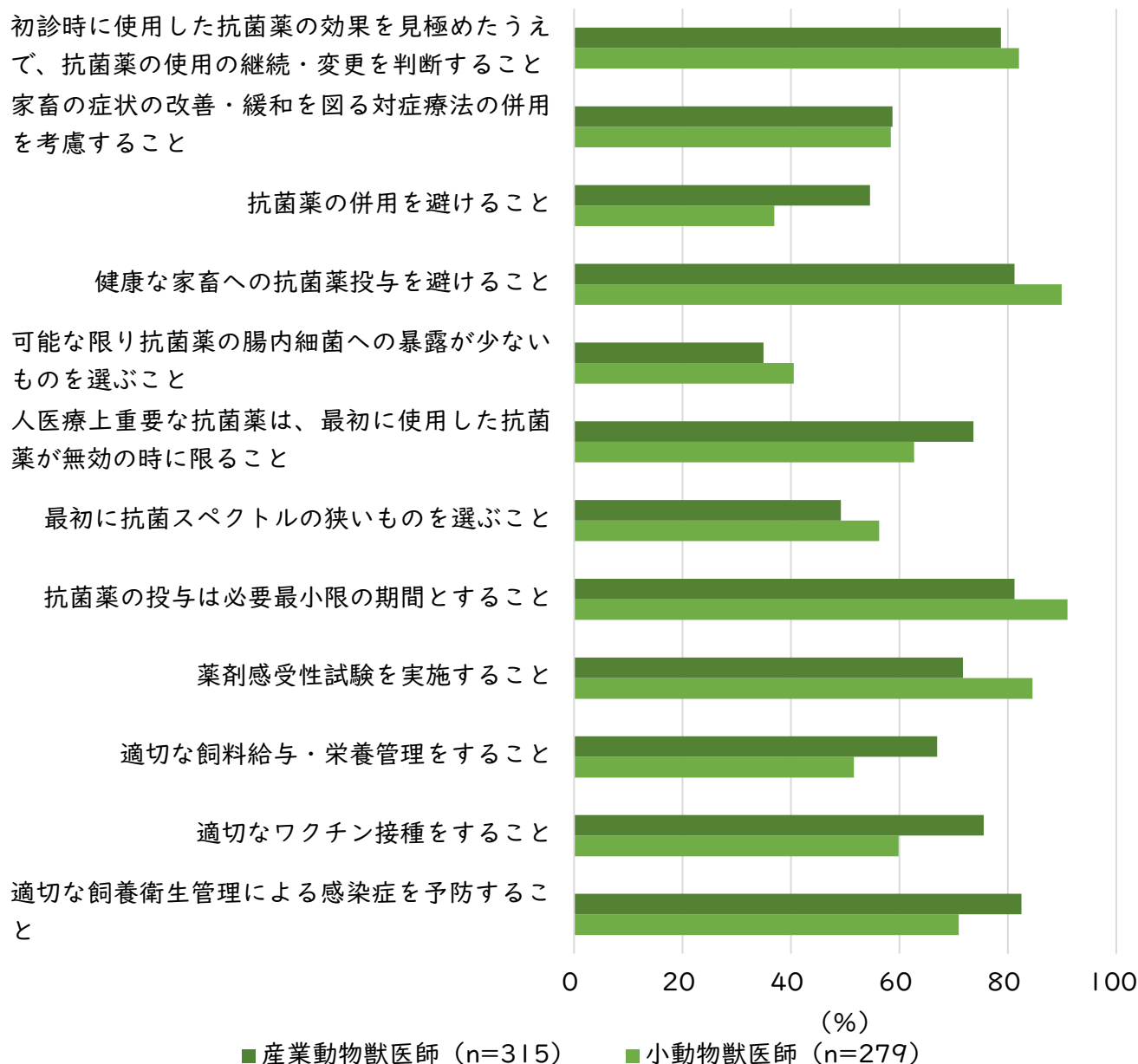


【コメント】

- 人に説明できる程度に知っていると回答した割合は、産業動物臨床獣医師が約22%、小動物臨床獣医師が約16%と、産業動物臨床獣医師のほうが高かった。
- 一方で、名前だけを知っていると回答した割合は両者とも50%以上であり、内容の周知が課題である。

【設問2】

「畜産物生産における動物用抗菌性物質製剤の慎重使用に関する基本的な考え方」の認知度

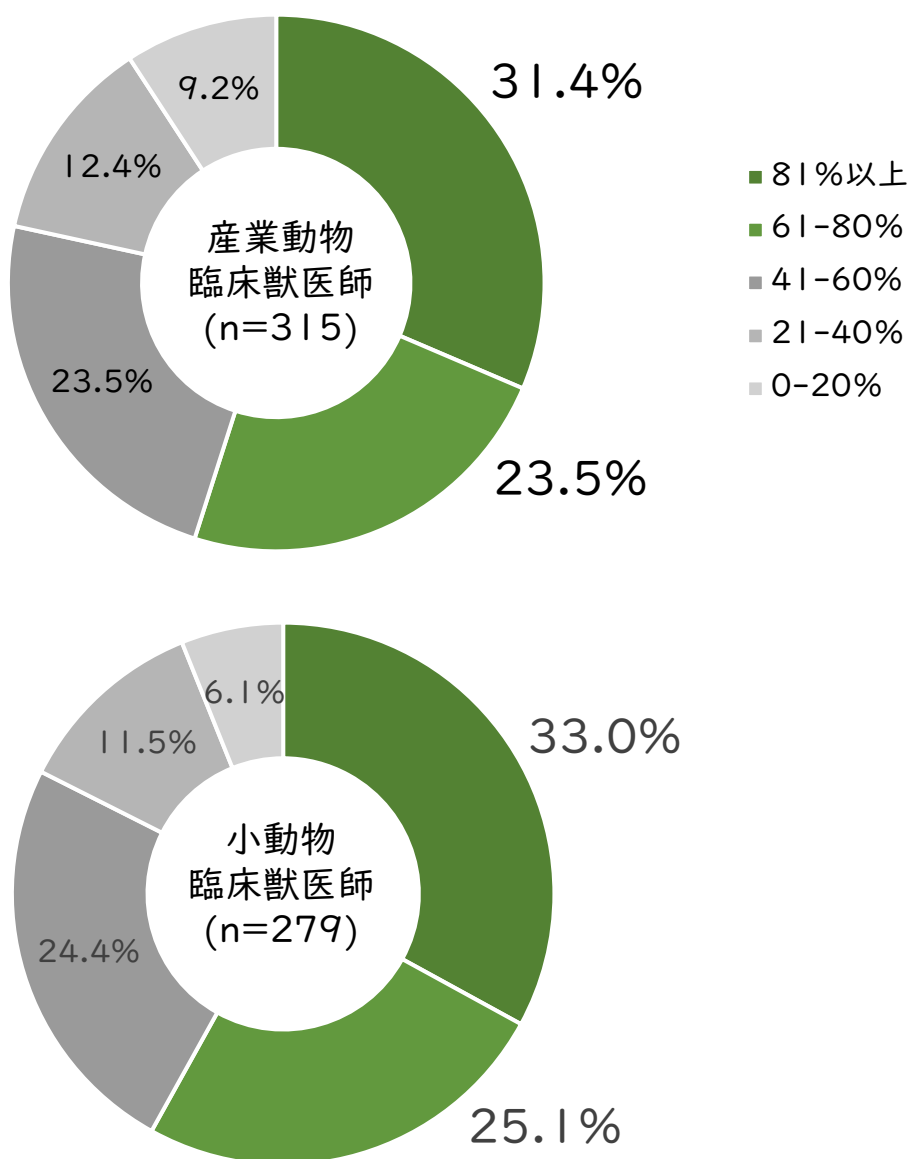


【コメント】

- 適切な飼料給与・栄養管理、適切なワクチン接種、適切な飼養衛生管理に関する認知度、では産業動物臨床獣医師の認知度が高く、感受性試験の実施や抗菌薬投与を必要最小限の期間とする、などでは小動物臨床獣医師の認知度が高かった。
- 可能な限り抗菌薬の腸内細菌への暴露が少ないものを選ぶこと、では両者とも認知度が低かった。

【設問 3】

過去1年間で、「適切な診断に基づいて抗菌薬の使用を真に必要な場合に限定する、そして、使用する必要がある場合は、有効な抗菌薬を適切に選ぶとともに、必要最小限の使用量とする」ということを日頃の診療において、心がけた割合はどれくらいですか。

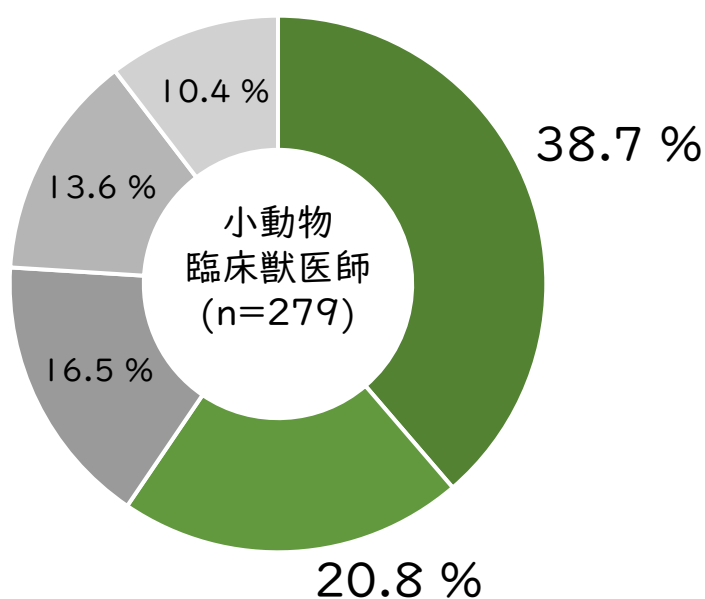
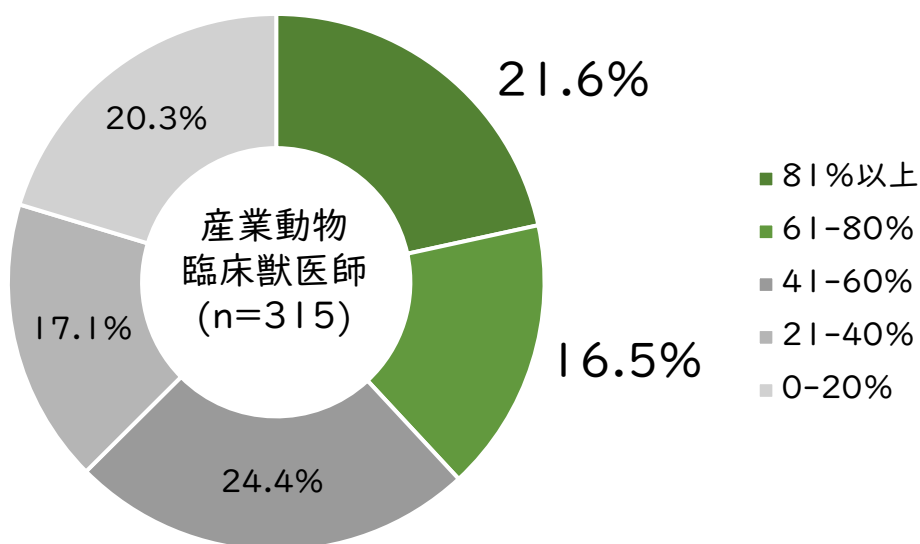


【コメント】

- 心がけた割合が61%以上であると回答した割合は両分野とも約55%だった。

【設問 4】

過去1年間で、疾病の発生を減らす目的で、飼養衛生管理の改善やワクチンによる感染症予防を指導した割合はどれくらいですか。

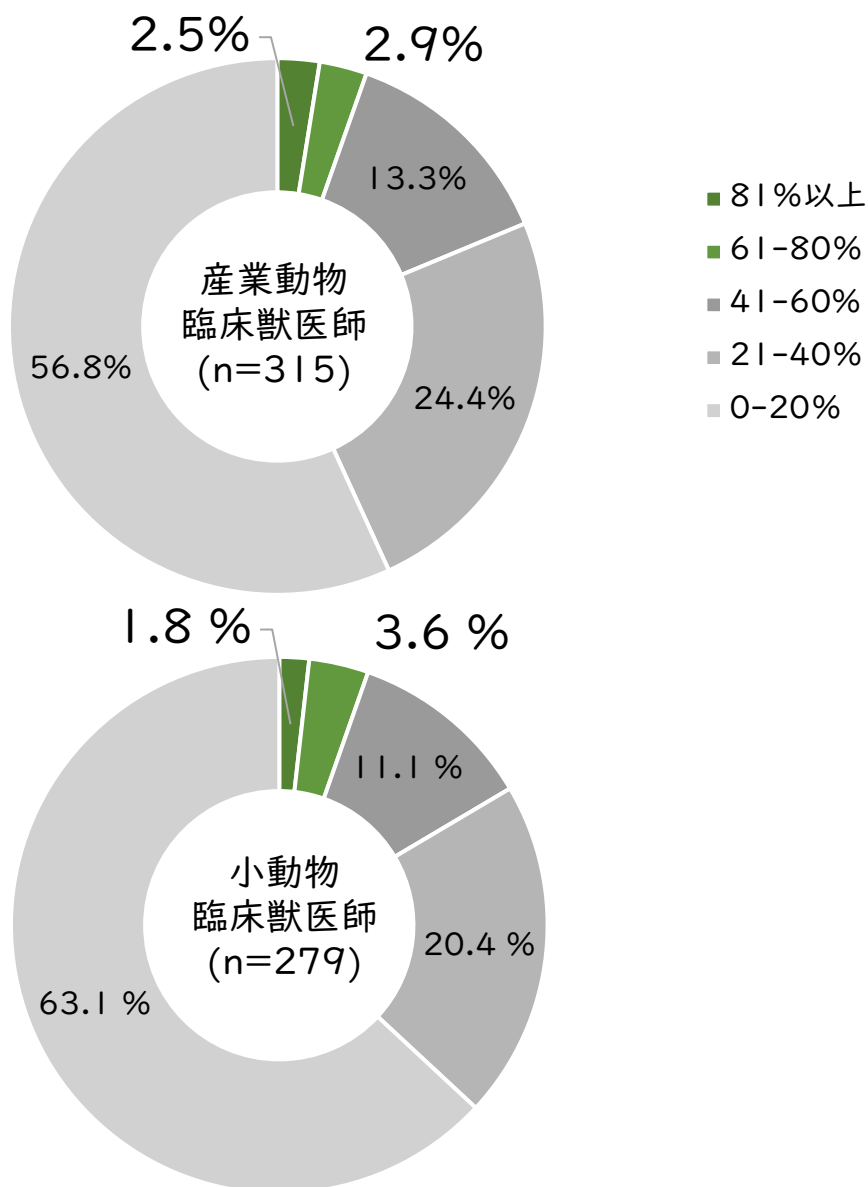


【コメント】

- 指導した割合が61%以上であると回答した割合は、産業動物臨床獣医師が約38%、小動物臨床獣医師が約60%と、小動物臨床獣医師のほうが高かった。

【設問 5】

過去1年間で、日々の診療において、抗菌薬の使用に当たり、薬剤感受性試験を実施した割合は、どれくらいですか（外部機関への委託・依頼も含む）。

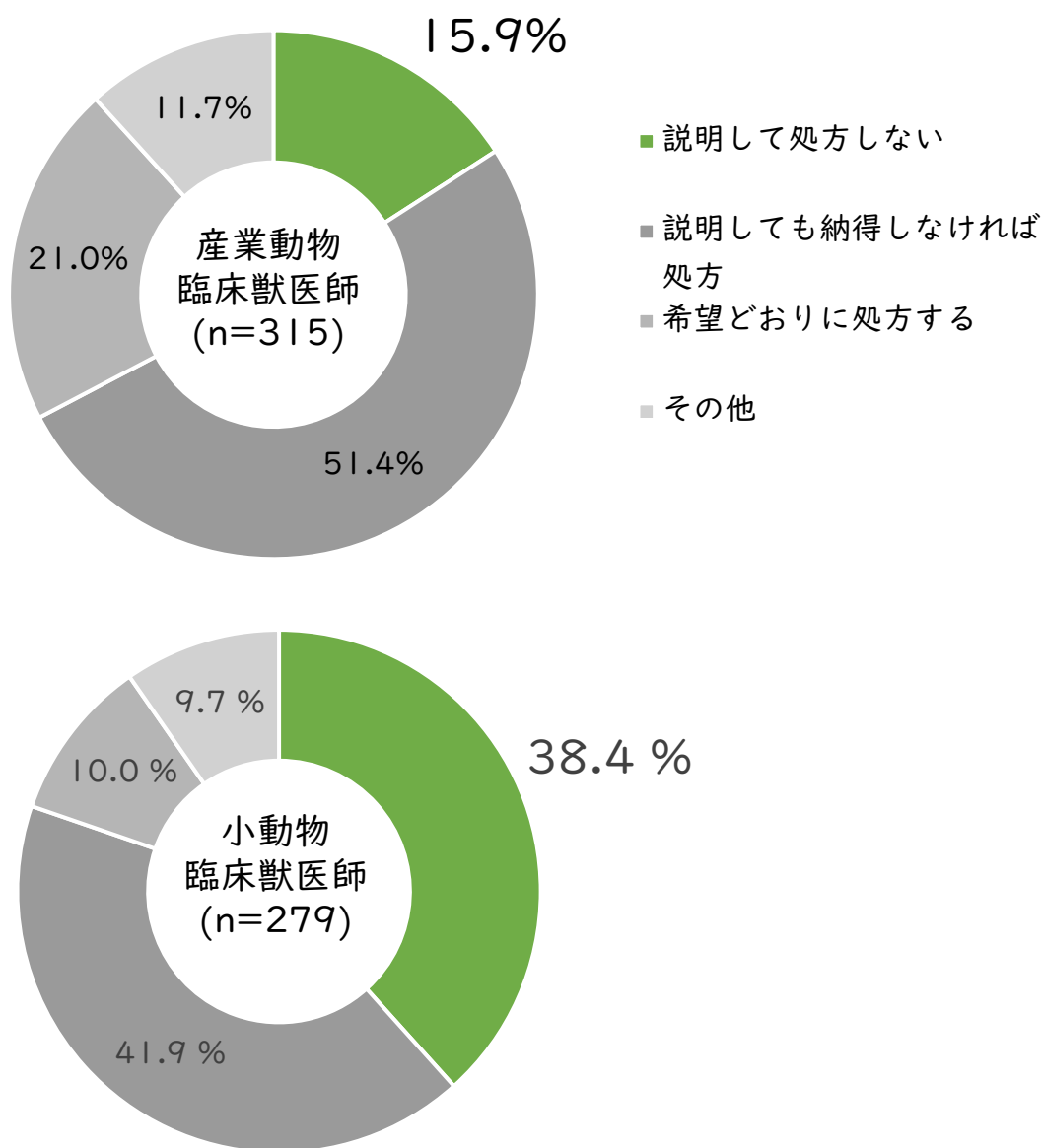


【コメント】

- 薬剤感受性試験を実施した割合が0～20%であると回答した割合は、産業動物臨床獣医師で約57%、小動物臨床獣医師で約63%だった。
- 薬剤感受性試験を実施した割合が81%以上であると回答した割合は、産業動物臨床獣医師で約3%、小動物臨床獣医師で約2%だった。

【設問 6】

ウイルス感染症と診断したが、動物の所有者又は管理者が抗菌薬処方を希望した時の対応はどのようにされていますか。



【コメント】

- 説明して処方しないと回答した割合は、産業動物臨床獣医師で約16%、小動物臨床獣医師で約38%と、小動物臨床獣医師のほうが高かった。

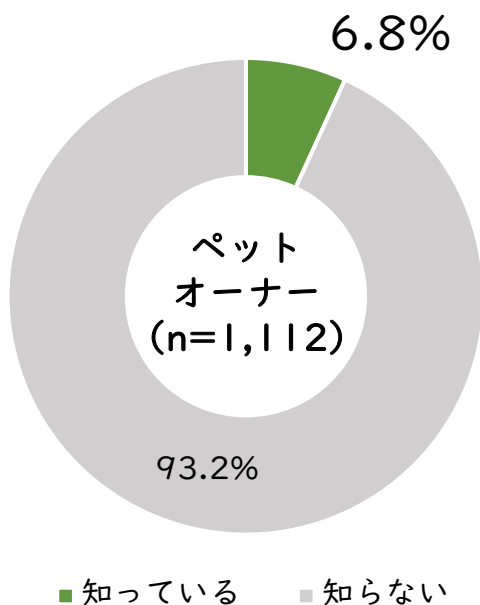
設問6で、その他と回答した理由

産業動物臨床獣医師	小動物臨床獣医師
二次感染症を防ぐために使用する	ウィルス感染が基盤にあるが、二次感染で細菌感染を併発し、悪化要因になっているときに処方
ウィルス感染の場合、初期に細菌感染の関与が考えられる場合は抗菌剤の使用もありうる	ウィルス感染症のみが原因である（＝細菌感染は存在しない）と確実に診断できるケースやスキルが少なく、二次感染予防として処方する場合が多い
ウィルス感染によって 抗病性低下している状態なので 二次感染予防の目的で使用した	ウィルス病であっても二次感染が怪しいときは抗生剤を出す
二次感染により病状が重篤、長期化の危険性を踏まえた場合、処方し、早期治癒および感染の蔓延を予防する	ウィルス単独感染症は実際は少なく、細菌感染も、同時に認められることが多い
二次感染粧の程度の判断・予測で抗菌剤の使用の有無を考える	ウィルス感染の診断自体少ない
ウィルス感染症と確定しにくい	そのような希望をされたことはない
ウィルス感染症でも肺炎のような場合は細菌感染しやすくなるので、抗生剤を処方する	そのような事例が無い
牛診療においてウィルス単体感染は少ないと考える	とくに獣医師の処方以外に抗菌薬を希望されたことはない
ウィルス感染症と確定診断できる環境にない。また、農家の要望に関わらずBRDCなどは細菌感染も同時に起こっていると想定して抗菌薬を使用するケースが多い	該当なし
往診時すでにBRDCも疑われるので抗生剤使用することが多い	感染症治療に携わっていない
ウィルス感染症にり患している場合は、細菌性の感染症にもり患していると考えているので抗菌薬も投与する	抗菌薬を処方するかどうかは、獣医師が判断することだから
ケースバイケース。ウィルスのみの感染症であることを診断するには畜産では限界があり、細菌感染が否定できない多くの場合は抗菌薬を使わざるを得ない	細菌の二次感染に伴う症状の悪化に関しては適切な抗菌剤を処方する
実際、動物群での発生として細菌感染症が併発する場合が多いので、該当するシチュエーションをあまり経験していない	飼い主に理解してもらうため、一度は処方して納得してもらう
説明するとともに経過・症状から混合感染の疑いが強いもののみ抗菌剤を使用	飼い主の理解が重要だから
そのような状況にはならない	診療をしていないため
ワクチン接種を指示した	
経験がない	

3-3. ペットオーナーへの認知度調査結果

【設問1】

我が国の薬剤耐性対策をまとめた薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか。

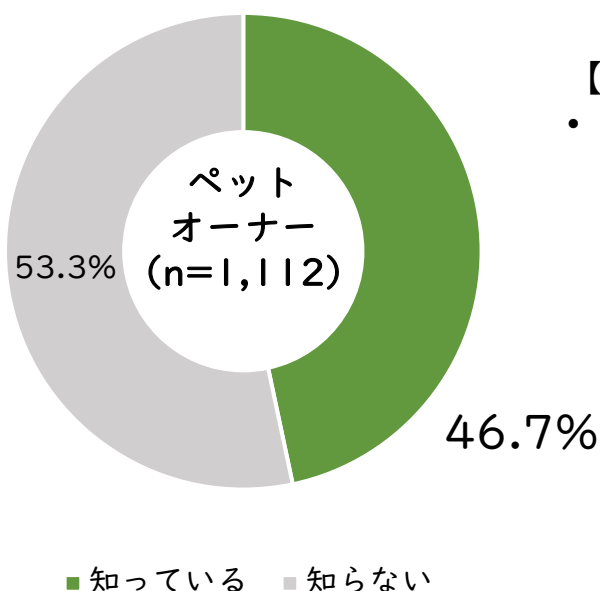


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約7%だった。
- アクションプランの存在、内容の周知が課題である。

【設問2】

薬剤耐性菌が人と家畜の細菌感染症治療を難しくすることをご存知ですか。

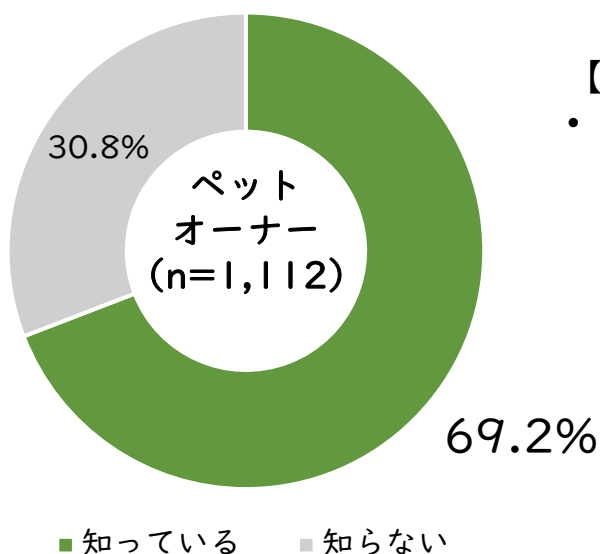


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約47%だった。

【設問 3】

抗菌薬の不適切な使用は、薬剤耐性菌の増加につながることをご存知ですか。

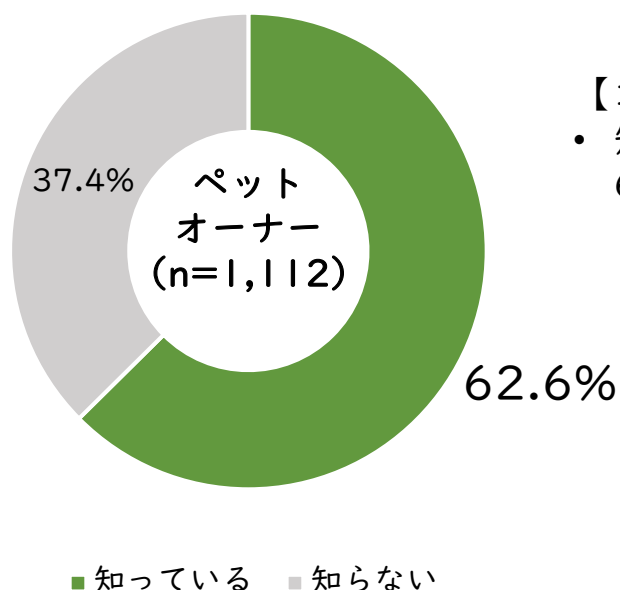


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約69%だった。

【設問 4】

飼養環境の改善やワクチンの使用により、病気の発生を予防することが、抗菌薬の使用を減らすことをご存知ですか。

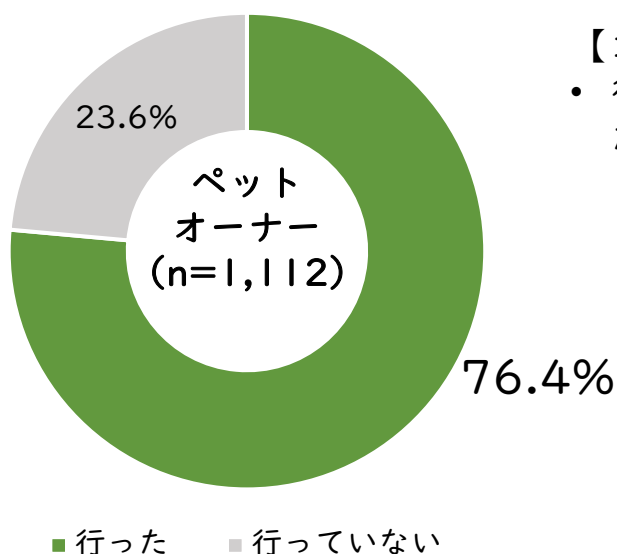


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約63%だった。

【設問 5】

過去1年間で、疾病の発生を減らすために飼養環境の改善や飼育動物へのワクチン接種を行ったことがありましたか。

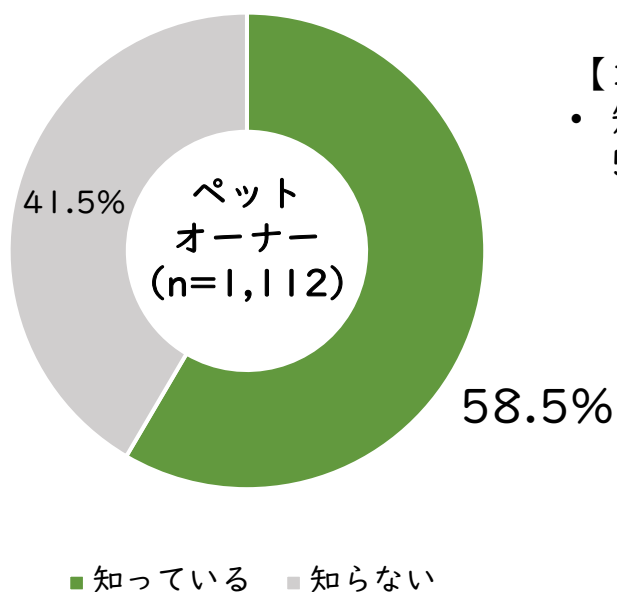


【コメント】

- 行ったと回答した割合は約76%だった。

【設問 6】

抗菌薬は、ウイルス感染症に効果がないことをご存知ですか。

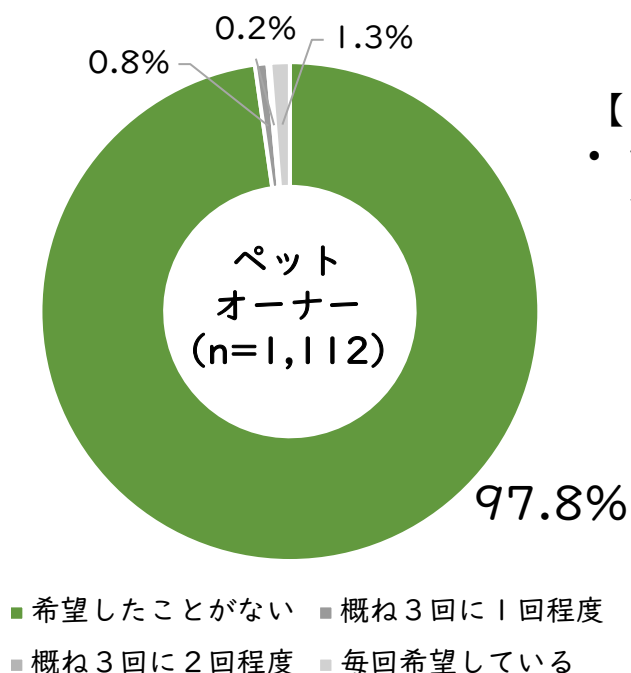


【コメント】

- 知っていると回答した割合は約59%だった。

【設問 7】

過去1年間で、ウイルス感染症と診断されたが、獣医師に抗菌薬の処方を希望したことがありますか。



【コメント】

- 希望したことがないと回答した割合は約98%だった。

参考 1. 生産者への認知度調査結果一覧

設問	回答	全体（n=238）		最も多く飼養している動物種													
				乳牛（n=107）		肉牛（n=34）		豚（n=55）		肉用鶏（n=16）		卵用鶏（n=17）		種鶏（n=8）		その他（n=1）	
		回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）
1 我が国の薬剤耐性対策をまとめた薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか	知っている	62	26.1％	20	18.7％	6	17.6％	19	34.5％	6	37.5％	4	23.5％	6	75.0％	1	100.0％
	知らない	176	73.9％	87	81.3％	28	82.4％	36	65.5％	10	62.5％	13	76.5％	2	25.0％	0	0.0％
2 薬剤耐性菌が人と家畜の細菌感染症治療を難しくすることをご存知ですか	知っている	186	78.2％	84	78.5％	25	73.5％	42	76.4％	14	87.5％	12	70.6％	8	100.0％	1	100.0％
	知らない	52	21.8％	23	21.5％	9	26.5％	13	23.6％	2	12.5％	5	29.4％	0	0.0％	0	0.0％
3 抗菌薬の不適切な使用は、薬剤耐性菌の増加につながることをご存知ですか	知っている	203	85.3％	83	77.6％	29	85.3％	50	90.9％	16	100.0％	16	94.1％	8	100.0％	1	100.0％
	知らない	35	14.7％	24	22.4％	5	14.7％	5	9.1％	0	0.0％	1	5.9％	0	0.0％	0	0.0％
4 飼養環境の改善やワクチンの使用により、病気の発生を予防することが、抗菌薬の使用を減らすことをご存知ですか	知っている	220	92.4％	93	86.9％	32	94.1％	53	96.4％	16	100.0％	17	100.0％	8	100.0％	1	100.0％
	知らない	18	7.6％	14	13.1％	2	5.9％	2	3.6％	0	0.0％	0	0.0％	0	0.0％	0	0.0％
5 過去1年間で、疾病の発生を減らすために飼養環境の改善や飼育動物へのワクチン接種を行ったことがありましたか	行った	196	82.4％	81	75.7％	31	91.2％	51	92.7％	15	93.8％	10	58.8％	7	87.5％	1	100.0％
	行っていない	42	17.6％	26	24.3％	3	8.8％	4	7.3％	1	6.3％	7	41.2％	1	12.5％	0	0.0％
6 抗菌薬は、ウイルス感染症に効果がないことをご存知ですか	知っている	165	69.3％	60	56.1％	28	82.4％	44	80.0％	13	81.3％	12	70.6％	7	87.5％	1	100.0％
	知らない	73	30.7％	47	43.9％	6	17.6％	11	20.0％	3	18.8％	5	29.4％	1	12.5％	0	0.0％
7 過去1年間で、ウイルス感染症と診断されたが、獣医師に抗菌薬の処方を希望したことがありますか	希望したことがない	204	85.7％	94	87.9％	28	82.4％	46	83.6％	13	81.3％	16	94.1％	6	75.0％	1	100.0％
	概ね3回に1回程度	17	7.1％	8	7.5％	3	8.8％	1	1.8％	3	18.8％	1	5.9％	1	12.5％	0	0.0％
	概ね3回に2回程度	3	1.3％	1	0.9％	0	0.0％	1	1.8％	0	0.0％	0	0.0％	1	12.5％	0	0.0％
	毎回希望している	14	5.9％	4	3.7％	3	8.8％	7	12.7％	0	0.0％	0	0.0％	0	0.0％	0	0.0％
8 飼料工場から購入された飼料にどのような抗菌性の飼料添加物が混ざられているかをご存知ですか	知っている	143	60.1％	45	42.1％	23	67.6％	41	74.5％	14	87.5％	12	70.6％	7	87.5％	1	100.0％
	知らない	95	39.9％	62	57.9％	11	32.4％	14	25.5％	2	12.5％	5	29.4％	1	12.5％	0	0.0％

参考 2．産業動物臨床獣医師への認知度調査結果一覧

設問	回答	全体（n=315）		診療動物種							
				乳牛（n=251）		肉牛（n=274）		豚（n=51）		肉用鶏（n=13）	
		回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）
1 我が国の薬剤耐性対策をまとめた薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか	人に説明できる程度に知っている	68	21.6％	46	18.3％	50	18.2％	18	35.3％	7	53.8％
	名前だけ知っている	163	51.7％	130	51.8％	149	54.4％	26	51.0％	5	38.5％
	全然知らない	84	26.7％	75	29.9％	75	27.4％	7	13.7％	1	7.7％
2 「畜産物生産における動物用抗菌性物質製剤の慎重使用に関する基本的な考え方」で、ご存知の項目があれば全てチェックしてください	適切な飼養衛生管理による感染症を予防すること	260	82.5％	208	82.9％	226	82.5％	45	88.2％	12	92.3％
	適切なワクチン接種をすること	238	75.6％	188	74.9％	204	74.5％	43	84.3％	12	92.3％
	適切な飼料給与・栄養管理をすること	211	67.0％	165	65.7％	180	65.7％	38	74.5％	12	92.3％
	薬剤感受性試験を実施すること	226	71.7％	180	71.7％	193	70.4％	39	76.5％	11	84.6％
	抗菌薬の投与は必要最小限の期間とすること	256	81.3％	205	81.7％	220	80.3％	41	80.4％	13	100.0％
	最初に抗菌スペクトルの狭いものを選ぶこと	155	49.2％	126	50.2％	131	47.8％	26	51.0％	9	69.2％
	使用した抗菌薬が無効の時に限ること	232	73.7％	182	72.5％	201	73.4％	35	68.6％	9	69.2％
	可能な限り抗菌薬の腸内細菌への暴露が少ないものを選ぶこと	110	34.9％	86	34.3％	93	33.9％	14	27.5％	4	30.8％
	健康な家畜への抗菌薬投与を避けること	256	81.3％	204	81.3％	221	80.7％	37	72.5％	11	84.6％
	抗菌薬の併用を避けること	172	54.6％	142	56.6％	151	55.1％	25	49.0％	9	69.2％
	家畜の症状の改善・緩和を図る対症療法の併用を考慮すること	185	58.7％	149	59.4％	159	58.0％	27	52.9％	10	76.9％
	見極めたうえで、抗菌薬の使用の継続・変更を判断すること	248	78.7％	200	79.7％	217	79.2％	37	72.5％	12	92.3％
3 過去1年間で、「適切な診断に基づいて抗菌薬の使用を真に必要な場合に限定する、そして、使用する必要がある場合は、有効な抗菌薬を適切に選ぶとともに、必要最小限の使用量とする」ということを日頃の診療において、心がけた割合はどれくらいですか	0-20％	29	9.2％	18	7.2％	26	9.5％	6	11.8％	1	7.7％
	21-40％	39	12.4％	32	12.7％	34	12.4％	4	7.8％	0	0.0％
	41-60％	74	23.5％	66	26.3％	68	24.8％	14	27.5％	1	7.7％
	61-80％	74	23.5％	61	24.3％	68	24.8％	7	13.7％	0	0.0％
	81％以上	99	31.4％	74	29.5％	78	28.5％	20	39.2％	11	84.6％
4 過去1年間で、疾病の発生を減らす目的で、飼養衛生管理の改善やワクチンによる感染症予防を指導した割合はどれくらいですか	0-20％	64	20.3％	56	22.3％	57	20.8％	3	5.9％	1	7.7％
	21-40％	54	17.1％	47	18.7％	51	18.6％	9	17.6％	1	7.7％
	41-60％	77	24.4％	62	24.7％	66	24.1％	11	21.6％	1	7.7％
	61-80％	52	16.5％	44	17.5％	45	16.4％	7	13.7％	0	0.0％
	81％以上	68	21.6％	42	16.7％	55	20.1％	21	41.2％	10	76.9％
5 過去1年間で、日々の診療において、抗菌薬の使用に当たり、薬剤感受性試験を実施した割合は、どれくらいですか（外部機関への委託・依頼も含む）	0-20％	179	56.8％	139	55.4％	164	59.9％	25	49.0％	8	61.5％
	21-40％	77	24.4％	64	25.5％	63	23.0％	14	27.5％	0	0.0％
	41-60％	42	13.3％	36	14.3％	36	13.1％	7	13.7％	2	15.4％
	61-80％	9	2.9％	8	3.2％	5	1.8％	3	5.9％	1	7.7％
	81％以上	8	2.5％	4	1.6％	6	2.2％	2	3.9％	2	15.4％
6 ウイルス感染症と診断したが、動物の所有者又は管理者が抗菌薬処方を希望した時の対応はどのようにされていますか	その他	37	11.7％	26	10.4％	31	11.3％	9	17.6％	2	15.4％
	希望どおりに処方する	66	21.0％	56	22.3％	58	21.2％	9	17.6％	4	30.8％
	説明しても納得しなければ処方	162	51.4％	135	53.8％	147	53.6％	21	41.2％	1	7.7％
	説明して処方しない	50	15.9％	34	13.5％	38	13.9％	12	23.5％	6	46.2％

参考 2. 産業動物臨床獣医師への認知度調査結果一覧（つづき）

設問	回答	診療動物種			
		卵用鶏（n=15）		その他（n=50）	
		回答数	割合（％）	回答数	割合（％）
1 我が国の薬剤耐性対策をまとめた薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか	人に説明できる程度に知っている	8	53.3％	7	15.2％
	名前だけ知っている	6	40.0％	25	54.3％
	全然知らない	1	6.7％	18	39.1％
2 「畜産物生産における動物用抗菌性物質製剤の慎重使用に関する基本的な考え方」で、ご存知の項目があれば全てチェックしてください	適切な飼養衛生管理による感染症を予防すること	14	93.3％	42	91.3％
	適切なワクチン接種をすること	14	93.3％	36	78.3％
	適切な飼料給与・栄養管理をすること	13	86.7％	32	69.6％
	薬剤感受性試験を実施すること	13	86.7％	34	73.9％
	抗菌薬の投与は必要最小限の期間とすること	13	86.7％	42	91.3％
	最初に抗菌スペクトルの狭いものを選ぶこと	11	73.3％	28	60.9％
	使用した抗菌薬が無効の時に限ること	12	80.0％	37	80.4％
	可能な限り抗菌薬の腸内細菌への暴露が少ないものを選ぶこと	6	40.0％	17	37.0％
	健康な家畜への抗菌薬投与を避けること	13	86.7％	40	87.0％
	抗菌薬の併用を避けること	10	66.7％	24	52.2％
	家畜の症状の改善・緩和を図る対症療法の併用を考慮すること	10	66.7％	27	58.7％
	見極めたうえで、抗菌薬の使用の継続・変更を判断すること	13	86.7％	42	91.3％
3 過去1年間で、「適切な診断に基づいて抗菌薬の使用を真に必要な場合に限定する、そして、使用する必要がある場合は、有効な抗菌薬を適切に選ぶとともに、必要最小限の使用量とする」ということを日頃の診療において、心がけた割合はどれくらいですか	0-20％	2	13.3％	1	2.2％
	21-40％	1	6.7％	5	10.9％
	41-60％	3	20.0％	15	32.6％
	61-80％	0	0.0％	10	21.7％
	81％以上	9	60.0％	19	41.3％
4 過去1年間で、疾病の発生を減らす目的で、飼養衛生管理の改善やワクチンによる感染症予防を指導した割合はどれくらいですか	0-20％	1	6.7％	13	28.3％
	21-40％	4	26.7％	6	13.0％
	41-60％	2	13.3％	15	32.6％
	61-80％	1	6.7％	6	13.0％
	81％以上	7	46.7％	10	21.7％
5 過去1年間で、日々の診療において、抗菌薬の使用に当たり、薬剤感受性試験を実施した割合は、どれくらいですか（外部機関への委託・依頼も含む）	0-20％	7	46.7％	24	52.2％
	21-40％	4	26.7％	11	23.9％
	41-60％	2	13.3％	13	28.3％
	61-80％	1	6.7％	0	0.0％
	81％以上	1	6.7％	2	4.3％
6 ウイルス感染症と診断したが、動物の所有者又は管理者が抗菌薬処方を希望した時の対応はどのようにされていますか	その他	3	20.0％	4	8.7％
	希望どおりに処方する	2	13.3％	13	28.3％
	説明しても納得しなければ処方	2	13.3％	25	54.3％
	説明して処方しない	8	53.3％	8	17.4％

参考 3. 小動物臨床獣医師への認知度調査結果一覧

質問内容	回答	全体（n=279）		診療動物種					
				犬（n=268）		猫（n=268）		その他（n=118）	
		回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）	回答数	割合（％）
1 我が国の薬剤耐性対策をまとめた薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか	人に説明できる程度に知っている	45	16.1%	42	15.7%	41	15.3%	19	16.1%
	名前だけ知っている	141	50.5%	135	50.4%	135	50.4%	64	54.2%
	全然知らない	93	33.3%	91	34.0%	92	34.3%	35	29.7%
2 「畜産物生産における動物用抗菌性物質製剤の慎重使用に関する基本的な考え方」で、ご存知の項目があれば全てチェックしてください	適切な飼養衛生管理による感染症を予防すること	198	71.0%	187	69.8%	188	70.1%	90	76.3%
	適切なワクチン接種をすること	167	59.9%	157	58.6%	157	58.6%	73	61.9%
	適切な飼料給与・栄養管理をすること	144	51.6%	136	50.7%	136	50.7%	67	56.8%
	薬剤感受性試験を実施すること	236	84.6%	228	85.1%	228	85.1%	103	87.3%
	抗菌薬の投与は必要最小限の期間とすること	254	91.0%	244	91.0%	244	91.0%	107	90.7%
	最初に抗菌スペクトルの狭いものを選ぶこと	157	56.3%	149	55.6%	150	56.0%	71	60.2%
	人医療上重要な抗菌薬は、最初に使用した抗菌薬が無効の時に限ること	175	62.7%	167	62.3%	167	62.3%	80	67.8%
	可能な限り抗菌薬の腸内細菌への暴露が少ないものを選ぶこと	113	40.5%	107	39.9%	108	40.3%	51	43.2%
	健康な動物への抗菌薬投与を避けること	251	90.0%	241	89.9%	241	89.9%	109	92.4%
	抗菌薬の併用を避けること	103	36.9%	96	35.8%	96	35.8%	46	39.0%
	動物の症状の改善・緩和を図る対症療法の併用を考慮すること	163	58.4%	155	57.8%	154	57.5%	77	65.3%
	初診時に使用した抗菌薬の効果を見極めたうえで、抗菌薬の使用の継続・変更を判断すること	229	82.1%	219	81.7%	219	81.7%	96	81.4%
3 過去1年間で、「適切な診断に基づいて抗菌薬の使用を真に必要な場合に限定する、そして、使用する必要がある場合は、有効な抗菌薬を適切に選ぶとともに、必要最小限の使用量とする」ということを日頃の診療において、心がけた割合はどれくらいですか	0-20%	17	6.1%	14	5.2%	14	5.2%	9	7.6%
	21-40%	32	11.5%	31	11.6%	31	11.6%	11	9.3%
	41-60%	68	24.4%	63	23.5%	64	23.9%	25	21.2%
	61-80%	70	25.1%	70	26.1%	70	26.1%	30	25.4%
	81%以上	92	33.0%	90	33.6%	89	33.2%	43	36.4%
4 過去1年間で、疾病の発生を減らす目的で、飼養管理の改善やワクチンによる感染症予防を指導した割合はどれくらいですか	0-20%	29	10.4%	27	10.1%	26	9.7%	15	12.7%
	21-40%	38	13.6%	35	13.1%	35	13.1%	13	11.0%
	41-60%	46	16.5%	43	16.0%	43	16.0%	16	13.6%
	61-80%	58	20.8%	57	21.3%	58	21.6%	20	16.9%
	81%以上	108	38.7%	106	39.6%	106	39.6%	54	45.8%
5 過去1年間で、日々の診療において、抗菌薬の使用に当たり、薬剤感受性試験を実施した割合は、どれくらいですか（外部機関への委託・依頼も含む）	0-20%	176	63.1%	170	63.4%	171	63.8%	72	61.0%
	21-40%	57	20.4%	53	19.8%	53	19.8%	29	24.6%
	41-60%	31	11.1%	30	11.2%	29	10.8%	14	11.9%
	61-80%	10	3.6%	10	3.7%	10	3.7%	2	1.7%
	81%以上	5	1.8%	5	1.9%	5	1.9%	1	0.8%
6 ウイルス感染症と診断したが、動物の所有者又は管理者が抗菌薬処方を希望した時の対応はどのようにされていますか	その他	27	9.7%	25	9.3%	25	9.3%	12	10.2%
	希望どおりに処方する	28	10.0%	27	10.1%	27	10.1%	15	12.7%
	説明しても納得しなければ処方	117	41.9%	111	41.4%	112	41.8%	51	43.2%
	説明して処方しない	107	38.4%	105	39.2%	104	38.8%	40	33.9%

参考 4. ペットオーナーへの認知度調査結果一覧

質問内容	回答	全体 (n=1112)		飼育動物種					
				犬 (n=402)		猫 (n=748)		その他 (n=104)	
		回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)
1 我が国の薬剤耐性対策をまとめた薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか	知っている	76	6.8%	35	8.7%	43	5.7%	12	11.5%
	知らない	1036	93.2%	367	91.3%	705	94.3%	92	88.5%
2 薬剤耐性菌が人とペットの細菌感染症治療を難しくすることをご存知ですか	知っている	519	46.7%	192	47.8%	354	47.3%	59	56.7%
	知らない	593	53.3%	210	52.2%	394	52.7%	45	43.3%
3 抗菌薬の不適切な使用は、薬剤耐性菌の増加につながることをご存知ですか	知っている	769	69.2%	274	68.2%	525	70.2%	78	75.0%
	知らない	343	30.8%	128	31.8%	223	29.8%	26	25.0%
4 飼養環境の改善やワクチンの使用により、病気の発生を予防することが、抗菌薬の使用を減らすことをご存知ですか	知っている	696	62.6%	253	62.9%	479	64.0%	70	67.3%
	知らない	416	37.4%	149	37.1%	269	36.0%	34	32.7%
5 過去1年間で、疾病の発生を減らすために飼養環境の改善や飼育動物へのワクチン接種を行ったことがありましたか	行った	850	76.4%	351	87.3%	562	75.1%	62	59.6%
	行っていない	262	23.6%	51	12.7%	186	24.9%	42	40.4%
6 抗菌薬は、ウイルス感染症に効果がないことをご存知ですか	知っている	650	58.5%	235	58.5%	437	58.4%	71	68.3%
	知らない	462	41.5%	167	41.5%	311	41.6%	33	31.7%
7 過去1年間で、ウイルス感染症と診断されたが、獣医師に抗菌薬の処方を希望したことがありますか	概ね3回に1回程度	9	0.8%	5	1.2%	6	0.8%	0	0.0%
	概ね3回に2回程度	2	0.2%	2	0.5%	1	0.1%	9	8.7%
	希望したことがない	1087	97.8%	388	96.5%	732	97.9%	104	100.0%
	毎回希望している	14	1.3%	7	1.7%	9	1.2%	0	0.0%